

時の動き

再生するアメリカ労働運動 職場からの闘争力構築が原動力

アメリカ政治社会運動ウオッチャー

佐野 修吉

自動車労組が歴史的勝利

アメリカ全米自動車労組UAWは、23年秋、歴史に残る闘争で大きな勝利を獲得した。

その戦略は、従来の慣習にとらわれない、「スタンド・アップ・ストライ」①ビッグ3（GM、フォード、スランテイス（旧クライスラー））の3社で同時にストライキ実施、②最初に組み立て工場、一週間ごとにスト実施工場を拡大 ③スト指名のない職場は自発的残業拒否とスト職場への支援部隊の派遣というものだ。

また、交渉経過は幹部しか知らない

のが通例だったが、シヨン・フェイン会長は、ほぼ毎週フェイスブックのオンラインサイトで、交渉の経過を詳しく報告した。それを数万の組合員が視聴して情報を共有した。

目を見張る合意内容

まず、賃金は今後4年半をかけて最低でも25%（即時11%）引き上げることになった。07年に失った生活費調整給も復活する。これを合わせると、4年半で製造労働者の最高賃金は現在の時給32ドルから42ドルに、技能労働者の時給は50ドルを超えることになる。初任給は18ドルから28ドルに引き上げられる（金額は概算）。

最も大きな課題は「二層」賃金の解消だった。リーマンショック後の不況で、UAWは、既存の組合員の雇用と労働条件を守るために、新規雇用労働者の労働条件の大幅切り下げを受け入れた。その結果、新規雇用の労働者は期間雇用労働者や子会社雇用社員となり、職場には従来の労働条件で働く労働者と「二つの層」が形成された。

その後、自動車各社は記録的な利益を上げるようになったが、労働者の賃金は下がり続け、職場から「二層」賃金の廃止を求める声があがってきた。

合意内容は「最高賃金への到達期間を8年から3年へ短縮」「期間雇用労働者の正規社員化」「子会社社員にも



9月15日、デトロイトで組合員と行進する
UAWのショーン・フェイン会長
JACOBIN 11. 27

基本協定を適用」などである。90日以上の雇用期間労働者は、批准後直ちに正規雇用に転換される。差別は残るものの二層賃金廃止はほぼ実現した。

次の争点はEV（電気自動車）の組織化だった。「EVへの移行は、UAWの労働者に対する死刑宣告だ」と受け止められていた。EV生産は、内燃機エンジンよりも部品数が激減する

上に技術と工程も単純化され、求められる熟練度も低下する。また、会社側はUAWの組織化を徹底して排除してきた。

そのEV化でフォードとは「現在建設中の2工場を組合を承認する」手続きが合意された。GMとステランティスとは、合弁バッテリー工場の労働者を基本協約に含めることで合意した。

脚本家や俳優労組もストで勝利

また、全米脚本家組合は5月から9月まで、俳優労組（映画俳優組合早アカメリカ・テレビ・ラジオ芸術家連盟）は、7月から11月まで、それぞれ全面ストライキで闘い勝利した。

主な合意内容は報酬の引き上げと、AIに関するものだった。特にAIに関して、ある活動家は「私たちがAIとオートメーションに関する新たな基準を打ち立てたということだ。このストライキは、ハリウッドだけでなく、

アメリカ全土、さらには世界中の、これから起こる多くの労働争議に影響を与えるだろう。」と評価している。

職場からの組織・活動家づくり

米国では、一般組合員のことをrank and fileと表現する。

このrank and fileを活性化する取り組みが、1979年に創立されたレイバー・ノーツ（本やパンフレットを出版し、労働運動活動家の大会を2年に1度開催し、様々な労働問題に関する地域的なワークショップや労働学校を運営している）を中心に各地で展開された。

そこで育った活動家を中心に、各組合で民主主義的組織運営と階級対立の視点をもった闘争を追求するようになった。

この地道な努力が、アメリカ労働運動が再生しつつある原動力の最大のものだ。
(さの しゅうきち)